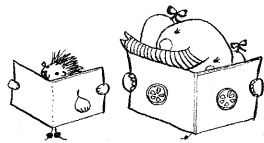


## 巻頭言

# 子どもと自然

立川多恵子

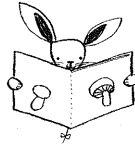
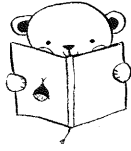


自然の中に浸りきって楽しむ子どもたちと出会いたい。そんな気持ちで、筆者は久しぶりに「森の幼稚園」に行きました。

この園は創設されて五十二年になります。初代園長は牧師でしたが、近隣の子どもの遊べる場をつくりたいと考え、教会の集会所を利用して遊び会をつくりました。年々園児が増えてくると、教会の集会所では手狭になり、町の集会所を借りるようになります。主任は絵本の大好きな人で、子どもたちに絵本を読むことを楽しみにしていました。そのうち子どもたちの絵本作りが始まり、保育者も仲間に入れて一冊の絵本（『ずっこけどん』）を完成させます。

だいぶ前になりますが、筆者は東京都美術館の手作り絵本コーナーでその絵本と出会い、それがきっかけでこの園を何度か訪ねています。

園の所在地は東京ですが、自然の残っている山間の地にあります。初代園長が病



気のため引退すると、次の園長を主任が引き継ぎ、自分の子ども時代の体験を思い出して、七年前に「山登り」を企画しました。

毎週金曜日、季節によってコースを変え、二十五名前後の幼児と一緒に十キロ余りの山歩きを続けています。幸いなことに定年で教職を退いた男性が協力しています。新入園児やその日の体調が悪くて園に残る子もいますが、その子たちも山登りのできる日が待ち遠しいのです。

筆者が参加した日、リーダーが「きょうはジェットコースターに行こうか」と声をかけると子どもから歓声が上がりました。

出発、一列になったり、二列になったりして登り始めます。途中、がけ登りにも挑戦。遠回りする子もいますが、ほとんどの子は急勾配のがけに四つんばいになって頑張ります。中には「きょう初めて挑戦」という子もいて、何度も滑り落ち、ハラハラさせますが、先輩たちがつかまりやすい枝や根っこを教えるのです。頂上に達した時、子どもたちは早速、急勾配を次々に滑り込みました。先生たちは、はじめは「危ない」と思ったようですが、活発な子ばかりでなくほかの子どもたちも次々続くので、子どもに任せることにしたと話していました。先頭のグループの子どもたちにとっては、公園のジェットコースター以上にスリルがあるに違いありません。子どもが生み出した自然がつくる最高の遊具です。後ろの方の子はお尻を

真っ黒にして降りてきます。

みんなそろったところで「お弁当どこで食べようか」という声、「神社がいい」と叫ぶ子はアリ地獄がおもしろいのです。結局、多数決で「公園」ということになりましたが、公園まではもう一山越えなければならず、クローバーの花の咲いている原っぱに着いたのは正午を過ぎていました。グループで食べる子、一人で食べる子、いろいろです。

山歩きの途中、一度だけトラブルに出合いました。M子が汚したパンツを先生が木陰で取り替えてやった時のことです。L雄が「Yちゃん先に行っちゃったから、僕、Mちゃん待っていてやるの」と。しかし、待っていたL雄がM子と手をつないだ途端に、先を歩いていたY男が飛んできて、L雄をピシヤリとたたきました。先生が「謝りなさい」と言うと、Y男はちよつと躊躇していましたが、「ごめんね」と言つて、さつとM子の手を握つて歩き出しました。自然の中でも子どもたちの関係は複雑です。

その日の筆者の役割は、最後までしんがりを書くことでしたが、長い道のりの最初から筆者の前を黙々と歩いていたK太が、筆者が花の写真を撮つて遅れた時には待っていてくれました。「ありがとう」と言うと、K太の重い口が開いて、「僕、入院したの」と言います。それできょうはゆっくり後ろを歩いていたのかと合点しま



した。K太は続けて、「おばあちゃんがお泊まりしてくれたの」と。おばあちゃんが病院に泊まり込んでくれたらしいのです。その祖母と筆者の面影が重なったのでしょうか。

時々車道に出ることがあると、「気をつけて」と先生の甲高い声が響きます。その声こそ、子どもの育ちを見守る保育者の現代社会への「悲鳴」といえましよう。

どの子も金曜日が待ち遠しい。一緒に参加した筆者にとって強行軍だったのに、歩けなくなる子はいないのです。子どものエネルギーの大きさにいまさらのように驚きます。自然の中では人工的な制約が少ないので、一人ひとりの子どもがその子らしく過ごせるのです。そのことが次の週の山登りへの期待になり、参加できない時の残念さにつながると考えられます。園長の幼い日の思い出から生み出された山登りの企画は、子どもの体力増進のためにもよい企画ですが、そればかりではありません。子どもはあふれる自然の中で充分に自己発揮し、さまざまな形で成長のきっかけを得るのです。そこには厳しさもあり、楽しさもあります。たとえ失敗経験であったとしても、貴重な経験です。

子どもたちに自然を残したい。子どもたちのために自然を生かしたい。これは自然破壊に何らかの形で加担してしまった世代の祈りに似た願いでもあるのです。

(元十文字学園女子短期大学)